

熊本発SDGs

持続可能な未来へ



CHAPTER 5

支え合い

「でんでん虫」の日々

市中央区の市民活動支援センターあいぽーとに、一つの大好きな輪ができる。NPO法人「でんでん虫の会」が開く「おしゃべり会」に集う会員の輪だ。お題に沿って毎回語り合は、「初夢」と「今年の抱負」は「初夢」と「今年の抱負」だ。

①抱負は：やっぱり健康が一番」と語る男性は79歳。元ホームレスで、今は市営住宅で1人暮らし。別の男性は今年で50歳。発達障害に加え、精神疾患がある。生活保護を受け、住まいは家賃3万1千円のワンルーム。体調悪化で途切れた就労支援事業所を近く再開する。「自分でできることを、みんなと一緒に挑戦したい」

毎週水曜の屋下がり、熊本中央区の市民活動支援センターあいぽーとに、一つの大好きな輪ができる。NPO法人「でんでん虫の会」が開く「おしゃべり会」に集う会員の輪だ。

「夢は見なくなつたなあ。

抱負は：やっぱり健康が一

番」と語る男性は79歳。元ホ

ームレスで、今は市営住宅で1人暮らし。別の男性は今年で50歳。発達障害に加え、精

神疾患がある。生活保護を受

け、住まいは家賃3万1千円

のワンルーム。体調悪化で途

切れ

た。お題に沿って毎回語り合

は「初夢」と「今年の抱負」

「つながる安心」生む場に

ん、だれでん、かれでん」。

その名の由来に思いを込め

る。

設立以来の中心メンバーや、

前事務局長の吉松裕藏さん

。(70)は言つ。「不安を抱いて

る。

「でんでん虫」も高齢者が

自殺未遂を経験した。元ホ

ームレスで「でんでん虫に入っ

て『1人』だという感覚がな

くなつた」。進行役を務める

おしゃべり会のお題はさまざ

まな。「好きな祭りは?」「人

が2回あつたら?」。問い合わせる参加者の言葉には郷

愁や後悔にもじむ。無言の人

もいるが、その場に身を置く

ことが「つながる安心」を生

むという。山本さんは、一人

一人をおもんばかりながら

盛り上げる。「今年もワ

ンチームで頑張りましょ

う」と笑顔で語る。山本さん

は、元ホームレスの人に限

らない。1人暮らしの人が

限らない。1人暮らしの人が

支え合える横ぐしの仕組みが

必要だ」

少子高齢化や人口減少が加速

する日本社会。その姿貌は、

1人暮らしの急増にも表れて

いる。国立社会保障・人間

問題研究所が2年前に公表した

将来推計によると、金世帯に

占める1人暮らしの割合は40

年に39・3%に達する。15年

時点の34・5%から約3倍も

たきつかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

「でんでん虫」も高齢者が

寄りのない人だけでなく、家

族との縁を断つた人も少な

くない。おしゃべり会を始め

た生きかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

理事会の山本照文さん(71)も

自殺未遂を経験した。元ホ

ームレスで「でんでん虫に入っ

て『1人』だという感覚がな

くなつた」。進行役を務める

おしゃべり会のお題はさまざ

まな。「好きな祭りは?」「人

が2回あつたら?」。問い合わせる参加者の言葉には郷

愁や後悔にもじむ。無言の人

もいるが、その場に身を置く

ことが「つながる安心」を生

むという。山本さんは、一人

一人をおもんばかりながら

盛り上げる。「今年もワ

ンチームで頑張りましょ

う」と笑顔で語る。山本さん

は、元ホームレスの人に限

らない。1人暮らしの人が

限らない。1人暮らしの人が

支え合える横ぐしの仕組みが

必要だ」

少子高齢化や人口減少が加速

する日本社会。その姿貌は、

1人暮らしの急増にも表れて

いる。国立社会保障・人間

問題研究所が2年前に公表した

将来推計によると、金世帯に

占める1人暮らしの割合は40

年に39・3%に達する。15年

時点の34・5%から約3倍も

たきつかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

「でんでん虫」も高齢者が

寄りのない人だけでなく、家

族との縁を断つた人も少な

くない。おしゃべり会を始め

た生きかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

理事会の山本照文さん(71)も

自殺未遂を経験した。元ホ

ームレスで「でんでん虫に入っ

て『1人』だという感覚がな

くなつた」。進行役を務める

おしゃべり会のお題はさまざ

まな。「好きな祭りは?」「人

が2回あつたら?」。問い合わせる参加者の言葉には郷

愁や後悔にもじむ。無言の人

もいるが、その場に身を置く

ことが「つながる安心」を生

むという。山本さんは、一人

一人をおもんばかりながら

盛り上げる。「今年もワ

ンチームで頑張りましょ

う」と笑顔で語る。山本さん

は、元ホームレスの人に限

らない。1人暮らしの人が

限らない。1人暮らしの人が

支え合える横ぐしの仕組みが

必要だ」

少子高齢化や人口減少が加速

する日本社会。その姿貌は、

1人暮らしの急増にも表れて

いる。国立社会保障・人間

問題研究所が2年前に公表した

将来推計によると、金世帯に

占める1人暮らしの割合は40

年に39・3%に達する。15年

時点の34・5%から約3倍も

たきつかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

「でんでん虫」も高齢者が

寄りのない人だけでなく、家

族との縁を断つた人も少な

くない。おしゃべり会を始め

た生きかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

理事会の山本照文さん(71)も

自殺未遂を経験した。元ホ

ームレスで「でんでん虫に入っ

て『1人』だという感覚がな

くなつた」。進行役を務める

おしゃべり会のお題はさまざ

まな。「好きな祭りは?」「人

が2回あつたら?」。問い合わせる参加者の言葉には郷

愁や後悔にもじむ。無言の人

もいるが、その場に身を置く

ことが「つながる安心」を生

むという。山本さんは、一人

一人をおもんばかりながら

盛り上げる。「今年もワ

ンチームで頑張りましょ

う」と笑顔で語る。山本さん

は、元ホームレスの人に限

らない。1人暮らしの人が

限らない。1人暮らしの人が

支え合える横ぐしの仕組みが

必要だ」

少子高齢化や人口減少が加速

する日本社会。その姿貌は、

1人暮らしの急増にも表れて

いる。国立社会保障・人間

問題研究所が2年前に公表した

将来推計によると、金世帯に

占める1人暮らしの割合は40

年に39・3%に達する。15年

時点の34・5%から約3倍も

たきつかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

「でんでん虫」も高齢者が

寄りのない人だけでなく、家

族との縁を断つた人も少な

くない。おしゃべり会を始め

た生きかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

理事会の山本照文さん(71)も

自殺未遂を経験した。元ホ

ームレスで「でんでん虫に入っ

て『1人』だという感覚がな

くなつた」。進行役を務める

おしゃべり会のお題はさまざ

まな。「好きな祭りは?」「人

が2回あつたら?」。問い合わせる参加者の言葉には郷

愁や後悔にもじむ。無言の人

もいるが、その場に身を置く

ことが「つながる安心」を生

むという。山本さんは、一人

一人をおもんばかりながら

盛り上げる。「今年もワ

ンチームで頑張りましょ

う」と笑顔で語る。山本さん

は、元ホームレスの人に限

らない。1人暮らしの人が

限らない。1人暮らしの人が

支え合える横ぐしの仕組みが

必要だ」

少子高齢化や人口減少が加速

する日本社会。その姿貌は、

1人暮らしの急増にも表れて

いる。国立社会保障・人間

問題研究所が2年前に公表した

将来推計によると、金世帯に

占める1人暮らしの割合は40

年に39・3%に達する。15年

時点の34・5%から約3倍も

たきつかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

「でんでん虫」も高齢者が

寄りのない人だけでなく、家

族との縁を断つた人も少な

くない。おしゃべり会を始め

た生きかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

理事会の山本照文さん(71)も

自殺未遂を経験した。元ホ

ームレスで「でんでん虫に入っ

て『1人』だという感覚がな

くなつた」。進行役を務める

おしゃべり会のお題はさまざ

まな。「好きな祭りは?」「人

が2回あつたら?」。問い合わせる参加者の言葉には郷

愁や後悔にもじむ。無言の人

もいるが、その場に身を置く

ことが「つながる安心」を生

むという。山本さんは、一人

一人をおもんばかりながら

盛り上げる。「今年もワ

ンチームで頑張りましょ

う」と笑顔で語る。山本さん

は、元ホームレスの人に限

らない。1人暮らしの人が

限らない。1人暮らしの人が

支え合える横ぐしの仕組みが

必要だ」

少子高齢化や人口減少が加速

する日本社会。その姿貌は、

1人暮らしの急増にも表れて

いる。国立社会保障・人間

問題研究所が2年前に公表した

将来推計によると、金世帯に

占める1人暮らしの割合は40

年に39・3%に達する。15年

時点の34・5%から約3倍も

たきつかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

「でんでん虫」も高齢者が

寄りのない人だけでなく、家

族との縁を断つた人も少な

くない。おしゃべり会を始め

た生きかけは「あそこに行け

ば誰かいる、そんな場が欲し

と見込まれている。

理事会の山本照文さん(71)も

自殺未遂を経験した。元ホ

ームレスで「でんでん虫に入っ

て『1人』だという感覚がな

支え合い

「でんでん虫」の日々

[2]

振り子のよう見守りは「お互いさま」

見守りは「お互いさま」

ブルを繰り返していた。

「1人暮らしを支え合う」を合言葉に、市民団

は、自分のことを話すの
は、私のような人生を送
つてほしくないからです」。熊本市中央区の専

門学校で1月28日、社会
福祉士の養成講座に登壇
した塚田芳弘さん(62)は、ギャンブル依存症に
翻弄された半生を切々と
語った。

トラブルを重ねた末の
ホームレス生活。それで
も支援を受けてアパート
に入居し、安心を得たと
思えた。ところが待って
いたのは「孤立した生活」
だった。気付けばギャン

自ら命を断とうとした。
一つ一つは、誰もがいつ
遭遇するか分からぬト
ラブルだ。歯車が狂い、
流れ着いた熊本でも路
上生活を送った。「あの

週1回くらい。本当にひ
手になつた。

現在「でんでん虫」が
毎週開くおしゃべり会で
進行役を務める交流担当
理事の山本照文さん(71)
は当時、訪問を受けた一
人だ。

中華の料理人で、専門
店を経営した時期もあ
る。しかし50代、任され

「少しだけ、またお役に立
てればと思っていま
す」。居場所に戻った喜
びにあふれていた。

一方「でんでん虫」発
足まもなく、副代表を降
りた塚田さんは入退院を
繰り返した。今は配偶を
得て新生活を送る。望ん
できた「普通の生活」に
はなかなか届かないが、
サポートがいる妻(61)を

とりぼっち」。同じアパ
ートに住む元ホームレス
の男性が孤独死した。ド
アを開けると、部屋の空
気が鋭く鼻を突いた。

「でんでん虫」に入っ
た当初、おしゃべり会は
敬遠していたが、近くの
会員が「一緒に行こう」と誘つてくれた。進行役
を担つて5年ほどが過ぎ
ぎ、今は支える側に立つ。
それでも支援はお互い
さま。振り子は行つたり
来たりだ。昨夏、肺がん
の手術をした山本さんは
会を休んだ。復帰の際、
その声は弱々しかつたが

亡母にダブって見えた。
「迷惑ばかりかけて、何
にも親孝行ができるなかつ
たから」。息子を気遣い、
母がくれたお守りが唯一
の形見。妻を見守る塚田
さん的心の支えになつて
いる。(小多崇)



17 パートナーシップで
目標を達成しよう



中華の料理人で、専門
店を経営した時期もあ
る。しかし50代、任され

た店の経営者との衝突や
金銭問題、離婚も重なり、



笑顔で「おしゃべり会」の進行役を務める山本照文さん

1月29日、熊本市中央区

熊本発 SDGs

持続可能な未来へ

2020.2.2

支え合い

「でんでん虫」の日々

③

孤独死の不安

人との縁 “ホーム” 求めて



負債を被つたのが人生の分かれ目になった。妻子と別れ、地元以外で勤務しながら、脳出血で倒れたことも。福岡県の営業所を最後に退職し、帰る先もないまま九州を転々とした。

2010年、支援の会とは別に、立ち上げにかかわったNPO法人「でんでん虫の会」に参加し、縁とした。

船本さんは「大きなショックだった。ホームレスの方がアパートに入れれば区切りと考えていたが、そうではなかった」と振り返る。

吉松さんは「住まいを得て、ハウスレスを脱して、人とのつながりがなければ、ホームレスが続く」と話す。一見平穏でも家族や友人との関係が断たれた“ホームレス”は増えていくという。

「でんでん虫」の設立は、ある男性の孤独死がきっかけだった。1人暮らしのアパートで亡くなった男性が見つかったのは約2カ月後。路上生活も一緒に乗り越えた愛犬も傍らで餓死していた。

船本さんは「大きなショックだった。ホームレスの方があパートに入れれば区切りと考えていたが、そうではなかつた」と振り返る。

熊本市東区の市営住宅3階にある嶋農理之さん

(79)の部屋は質素だ。整

理整頓され、家財道具は最小限。前は中央区のアパート住まいだったが熊本地震で被災。避難所やみなし仮設住宅を経て、昨夏やっと落ち着いた。

「通院にもバスの便が良くて助かってるよ」

北陸出身。20歳のころ、

勤め先の織物工場での事

故で左手の肘から先を失つた。運送会社の経理を

つた。そこで信頼を寄

せたのが活動に汗してい

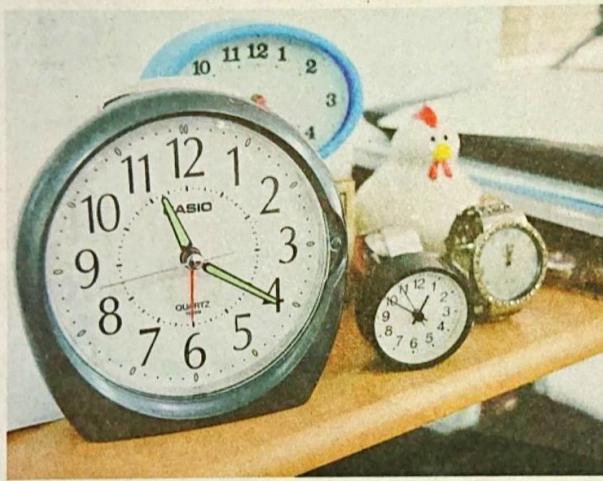
金が底をつけ、たどり着いた熊本市でホームレスになつた。障害年金が糧になればと望んだが、住所が退職した会社寮のままで手続きが進まなかつた。坪井川の橋の下での生活は6年に及んだ。

好転のきっかけは、NPO法人「くまもと支援の会」によるホームレスの人への「おにぎり配り」

だつた。そこで活動を寄

せたのが活動に汗してい

た船本満幸さん(71)と吉松裕藏さん(71)。2人が



「でんでん虫の会」の事務所に残されている数々の時計。亡くなった会員の遺品で、一人一人が「時を刻んだ証し」として保存している=熊本市中央区

熊本発SDGs

持続可能な未来へ

毎日1食分、おかげのみ届けてもらう配食業者の訪問も、自らの安否を知らせる機会になつてい る。それでも消えないのが、孤独死への不安。「一人つきりの部屋で倒れて救急車を呼べるのか。ドアの鍵をかけていたら助けに来た人が入れないかも…。いろんなことを考えてしまう」

吉松さんは「住まいを

得て、ハウスレスを脱して、人とのつながりがなければ、ホームレスが続く」と話す。一見平穏でも家族や友人との関係が断たれた“ホームレス”は増えている。 「でんでん虫に集うのはホームを求める人たちなのです」(小多崇)

支え合い

「でんでん虫」の日々

4

深い孤立

傷付きながらも「恩返し」



神障害があるが、軽度で障害年金は支給対象外。

「腰痛があるのでベッドが欲しい。でも本物は買えない」。生活保護で借りる部屋には、段ボール箱で作ったベッドを置く。

昨年末のことだとう。「いろんな高校生が毎日暴言を浴びせてきた」。熊本市内の障害者施設に通う男性(49)は、路上でいわれのない誹謗中傷を受けた、と訴え

昨年末からNPO法人「でんでん虫の会」のおしゃべり会に顔を出す。

参加者には福祉が十分及ばない人も多い。例えば

事実関係は不明。それでも男性が県外から移り住んで以来、サポートする支援者は察する。「子どものころから何度もつらい思いをし、今も周囲の言動に傷付けられる。訴えを受け止めたい」

男性には発達障害と精神障害を受けていた男性が自室にしつらえた手製の段ボールベッド=熊本市中央区

刑務所暮らしを重ねた

70代男性は、ある事件で15年の懲役刑を受けた。

出所後、県地域生活定着支援センターのサポートで住まいや家財道具を確保。ただ「死んでしまうか(出身地に戻るか)

1年ほど悩み抜いた」。

絡み付く過去の関係は断ちたいが、実際は帰る先もない。「物心ついたら児童養護施設にいた。

親のことは何にも知らない」。悩む日々に、パニック障害とうつを患つ

た。

「でんでん虫」には隣

室に住む会員の紹介で入

会した。男性にとって、おしゃべり会は「暇つぶ

し」と素っ気ないが昨秋、

病院で出会った知人を誘つた。

熊本地震では障害や病気、高齢で避難所に入れず、車に逃れた人は多かつた。サポートがより必要だったが、公的支援は後手に回った。独自に車中泊の実態を明らかにし、支援に動いたのはホーミレスなど社会的弱者を長年支える有志だった。

精神医療を巡って国は、長期入院から社会生

活に移行する「地域ケア」を構想。長期入院患者を2020年度末までに、14年比で最大3万9千人減を目指す。態勢づくりを急ぐも、患者の孤立を防ぐのは真のつなぎだ。男性は「でんでん虫」

精神医療を巡って国は、長期入院から社会生

活に移行する「地域ケア」を構想。長期入院患者を2020年度末までに、14年比で最大3万9千人減を目指す。態勢づくりを急ぐも、患者の孤立を防ぐのは真のつなぎだ。男性は「でんでん虫」

「暴言」に悩む男性は当時、車中泊調査に協力し、その現場を歩いた。支援の対象から漏れていた被災者に寄り添ったのは、「恩返しのつもりだった」と振り返る。(小多崇)

熊本発SDGs

持続可能な未来へ

支え合い

「でんでん虫」の日々

[5]

二重構造社会

震災が弱者に追い打ち

えた」と指摘する。

さらに近年各地で頻発する自然災害は、日雇い労働者に限らず経済的、社会的に弱い立場の人の暮らしを追い込む。熊本

かつての日本は「1億総中流社会」。終身雇用を基盤に豊かさを求めていた。それが「格差社会」に分断され、不安定な非正規雇用が大きく広がった。

しかし、「日本は元から格差社会、二重構造社会だったと見るべきだ」。熊本学園大の高林秀明教授(50)=地域福祉論=は「総中流と言われた時代も、その陰にあった日雇い労働者が安い賃金で働き、日本経済の成長を支

対象外。解体は家主の都合で、男性は放り出され

る格好になった。相談した区役所で紹介されたのが「でんでん虫」。現在の住まいに入る際、身元引受人になつてくれた。

現在、熊本市内のアパートに生活保護を受けて暮らす男性(83)は震災時、想定外の事態で住まいを失つた。「7年住んだアパートが、避難している間に取り壊された。家の財道具や写真も全部捨てられてしまった」

うし。散歩しても住民と話す機会はない。「同じ境遇の人と、近所で会でも開けたら気楽でしょうけど」

持病に加え心身の不調が続く。昨年は脳梗塞で救急搬送された。「ドア

が開けたら気楽でしょうけど」

まで一人ではつて行き、何とか鍵を開けて救急隊

は、通院や行政手続の同行、金銭管理の代行など幅広い。名付けて「さえ愛」。震災時は新規相談も多かった。散乱した家財道具の片付けも、1人暮らしの高齢者や障害者には大変な作業だ。

先の男性のように転居

段ボール箱6710個分の食器類の受け入れ窓口になり、仮設住宅などに配布した。

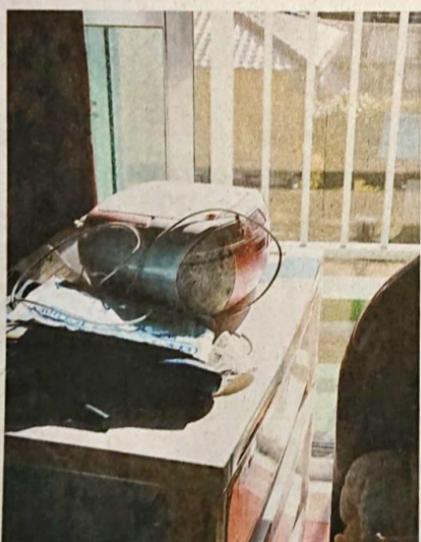
ただ「でんでん虫」は民間団体にすぎず、マンパワーや財源はわずか。対応に限界はある。二重構造社会で取り残される人々をどう支えるか。事務局長の永田貴子さん



熊本発SDGs



持続可能な未来へ



男性が暮らす部屋。一人で過ごす日常はラジオを聞く機会が多いという

支え合い

「でんでん虫」の日々

6

復興住宅の孤立

課題や苦悩“見える化”



熊本地震で被災し、住宅再建が困難な人の受け皿となる災害公営住宅（復興住宅）の整備が進んでいる。12市町村で計1715戸。入居者で目立つのは高齢の単身世帯だ。「今後は復興住宅での見守りが重要だ」と、支援活動を続ける一般社団法人「みのり」の代表、高木聰史さん（52）は指摘する。

生活再建のゴールとなる復興住宅も、過去の災害では「孤立」が深刻化している。阪神・淡路大震災では、「孤島」と漏れていた。アパートなどを利用することで「平時と変わらない」との見方があがったからだ。しかし現実は、体育馆での

震災では仮設住宅が解消された2000年以降も、兵庫県の借り上げ復興住宅などで1200人近くが孤独死している。

東日本大震災があつた東北では、復興住宅で50人以上が孤独死。熊本でも「みのり」はみなし仮設住宅を対象としてきた。ただ、委託元の益城町社会福祉協議会との契約は3月末で満了。今の体制は近く区切りを迎える。

NPO法人「でんでん虫の会」など、県内外でホームレスや独居者の支援物資や情報が届きにくく、住み慣れた土地から離れて孤立を深めた人が集結した。

まず目を向けたのは車中泊の避難者だ。公的支援が届かず、車中生活を送る構図は「ホームレスと同じ」。活動に加わった高木さんは当時、東日本大震災を機に設立された一般社団法人「社会的包摂サポートセンター」の電話相談窓口のコーディネーターだった。応じていたのは大震災

長期避難が困難で、いち早くみなし仮設に逃れた高齢者や障害者がいた。

た一般社団法人「よか隊ネット熊本」が動きだし、たのは、地震発生間もなく離れて孤立を深めた人

が多かった。

「みのり」の母体だった一般社団法人「よか隊ネット熊本」が動きだし、たのは、地震発生間もなく離れて孤立を深めた人

を包み込む「包摂」の対極にある「排除」の辛苦を味わってきた人たちの声を受け止めていた。困難にあっても自ら助けを求める、声を上げる人ばかりではない。頑強な復興住宅は、分厚いドアと壁が入居者の孤立を生むと懸念されている。「当事者や支援者の課題や苦悩を“見える化”して支え合うネットワークができるのか」。高木さんら「でんでん虫」の仲間は現在、連携を深めながら新たな支援体制を模索している。（小多崇）



でんでん虫の会が開いた委員会で、今後のネットワークづくりの重要性を話す高木聰史さん（右）=5日、熊本市中央区

熊本発SDGs

持続可能な未来へ



応じていたのは大震災

でいる。（小多崇）

支え合い

「でんでん虫」の日々

7

つながる訪問

「SOS」に耳を澄ます

10 人々の不平等
をなくそう

り参加。アパートへの入居や生活保護申請の助けを受け、今の生活に落ち着いた。

「煩わしい人間関係はごめん。今は一人がいい」と過去の関係に距離を置く。ほとんど外出しない

が「おしゃべり会だけは欠かせない」。社会と唯一接する機会になつてい

「集うだけではいけない」。「でんでん虫」の会員約60人から回答を得たアンケートによる吉松裕藏さん(71)は昨と、ほぼ半数が地元の民生委員や自治会長を「知らない」。いざという時に連絡を取れる人が「いない」のは3分の1に上った。

トントンタッチ。新規の「つながるあんしん訪問事業」のコーディネーターに転じ、会員宅への訪問などアウトリーチに重心を移した。

担当者の一人、会員の久保田千草さん(64)は「社会のどこにもつながらず、困りごとを言い出すことさえできない人がいる」と感じている。

久保田さんは以前、ケアマネジャーとして障害者や高齢者の公的な支援サービスを組み立てていた。接してきたのは福祉制度の利用を前提とした人たちだった。「今まで出会ってきた人たちと違

う。今は、本人も気付いていない困難さを掘り出す役割がある」と感じている。

自身は乳がんを患い、

抗がん剤治療の影響で

「全く動けない日もある」。それでも電話で会員とつながる日々だ。「ま

ずは世間話から。困ったときには遠慮せず助けてほしいと言つてもらえる信頼関係づくりが第一歩

ただ「気になる人」ほど、なかなか電話に出てくれない。「コミュニケーションが苦手だったり、拒絶感を示したりする人がいる」。携帯電話の先にある「埋もれたSOS」に耳を澄ませてい

る。(小多崇)



「でんでん虫の会」と会員を結ぶ携帯電話。会員に出来れない人とのつながりを模索している

熊本発SDGs

持続可能な未来へ



NPO法人「でんでん虫の会」が開く「おしゃべり会」には毎回20~30人ほどが集う。「体調を悪くして、ご無沙汰していました」。新顔、体験参加者のほか、常連も多い。

常連の女性(74)は県外暮らしが20年。地元の親類とは縁を切つており、身を寄せるあてもないまま4年前、古里熊本へUターンした。熊本市役所で紹介されたのが「でん虫」だ。連絡を取り、その足で新年会に飛び入

い。昨年6月、1人暮らし

とはいって、会員約260人のうち、おしゃべり会に参加する人は少數派だ。参加しない中には就業している人もいるが、人付き合いや、地域との関係が薄い人が少なくな

る。

「おしゃべり会だけは欠かせない」。社会と唯一接する機会になつてい

る」と感じている。

久保田さんは以前、ケアマネジャーとして障害者や高齢者の公的な支援サービスを組み立てていた。接してきたのは福祉制度の利用を前提とした人たちだった。「今まで出会ってきた人たちと違

う。今は、本人も気付いていない困難さを掘り出す役割がある」と感じている。

支え合い

「でんでん虫」の日々

[8]

社会的健康

「生きる力」書に見いだす



捉える必要があるとの説明だった。

「パチンコばかりしてイライラする毎日をずっと続けたくない」。会員の男性(56)は2年前、「書道をやってみたい」とふ

「足が弱らないよう散歩している」「10代で心の病を経験した。心の健康が大事だ」

NPO法人「でんでん虫の会」が開くおしゃべり会。昨年9月のある日のテーマは「健康」だった。会員が語り合つ一方、熊本市高齢者支援センターのスタッフが助言。「健康には三つの側面がある。身体的、精神的、そして社会的な健康です」。やりがいや人との関わりなど、社会的な面からも

いなかつた男性は退去の憂き目に。その後会つ



「生きる力」と書いた男性の作品を見つめる

熊本発 SDGs

持続可能な未来へ



書に魅せられた男性は自室で毎日、筆を執る。夜が深まる未明に漢詩を写し、思いのままの言葉

つけたらしい。はみ出してもいい」。教室で、初心者の男性が書く字には「心」があふれていたといふ。

中島さんが、恩師から学んだ書への姿勢は「手本通りではなく、心をぶつけたらしい。はみ出してもいい」。教室で、初心者の男性が書く字には「心」があふれていたといふ。

と「でんでん虫」に設立された「でんでん虫」が行き場のない男性を支えた。始めた。指導したのは会員の中島久米子さん(77)。亡母

山さんの直弟子から長く指導を受けるなど本格的な書道経験があった。大

胆な筆遣いが力強い。周囲との関係を閉ざして

てきた男性は今、書に「生きる力」を見いだしている。「人付き合いは面倒だけど一人でいるよりは楽だ」と話してくれた。「でんでん虫」の事務局長、永田貴子さん(49)はその変化を感じている。

(小多崇)

支え合い

「でんでん虫」の日々

9

網の目

地域のつながりより細かく

「お互いを知ろう」と題した地域包括ケア交流会が1日、熊本市中央区のウェルパルくまもとであった。大江、白川、白山の3校区の自治会役員や民生委員、病院や銀行、コンビニの担当者など約140人が参加。地元に拠点を置くNPO法人「でんでん虫の会」メンバーも加わった。

3校区の社会福祉協議会が毎年開催。「周りに気になる方がいませんか?」。市高齢者支援センターさんと福祉士、宮原浩一郎さん

を見なくなり、安否を確かめると自宅で倒れており、救急搬送した。

「退院後、女性が1人暮らしを続けられるかが問題になった」。実際は成年後見制度につなげ、支援者が関わりやすい態

(37)が実際の出来事を参考にした事例を挙げた。80代女性は1人暮らしこと違つてごみを分別できず、あいさつしてもうらん顔。認知症が疑われた。民生委員からの相談でささえりあが接触するも本人は拒絶。姿



大江、白川、白山の3校区の社会福祉協議会が開いた
地域包括ケア交流会=1日、熊本市中央区

も難しい」。あらかじめの方策として示したのは、地元のさまざまな関係者と住民の日々から「つながり」の大切さ

だ。

「二重、三重の網の目ができないか」。大江校区社協の会長、鳥崎一郎さん(66)は隣人関係が薄

れた今、つながりには「仕組みが必要」と考えている。庭の片付けなどの相談を受けながら、依頼者の真の困りごとに目を凝らす。アパート住まいの独立で単身世帯が占める割合は42・2%。大江校区は11・8%上回る54・0%に達する。民生委員も兼ねる鳥崎さんは「近所の支え合いが及ばず、公的サービスにも結び付かない場合がある。そんなとき、制度の外側に置いたままにせず、地域の支援の網の内側に入れていくたい」。

一つの試みが12年、地元の県営住宅建て替えに伴う高齢者の引っ越し支

熊本発SDGs



持続可能な未来へ



援を機に始めた生活支援だ。住民の声に応じる「何でも電話相談」と、ボランティアや法律、医療介護などの専門家を登録した人財バンクが2本柱。

「でんでん虫」の会員も担っている。「一人で生きるのが難しくなっても、細かい網の目があれば安心できる。そんなつながりのあるまちづくりをしていきましょう」。鳥崎さんは交流会で改めて呼び掛けた。(小多崇)

支え合い

「でんでん虫」の日々

10

新しい互助
薄らぐ地縁 お助け隊結成

NPO法人「でんでん虫の会」が昨年末に開いたクリスマス会は盛会だった。手分けして唐揚げやサラダを作り、ケーキを飾り付けた。「みんなの協力に感謝します」。

会場の「でんでん虫の家」は、熊本市中央区の集合住宅にある。会員が常に集まる場として2016年12月に開設。ただ助」が必要だ」

(42)は語る。「薄いだりあ淨行寺が提案した。管理者の田口善信さん

特別な日を除き、最近は訪れる会員は少ない。「地域の人にも立ち寄ってもらえる交流の場にしたいが、なかなか難しい」。山本さんは思案している。

しかし、地域社会に支え合いの一ีズは潜在している。でんでん虫の家がある校区と別の中央区黒髪、碩台校区では「地域版でんでん虫の会」を模索。昨年から聞く研修会は、両校区担当の市高齢者支援センターさえ

両校区とも健康サロンなどが「一人暮らしを支え合う」を実践する「でんでん虫」のような互助の創立一方で趣味などの活動範囲は地元にとどまらず、身近な住民と接点がない人も「地縁に入れない、入らない人がいる」と田口は語る。

熊本大がある黒髪校区。学生街の印象だが高齢化率は市平均とほぼ同じ26・4%で、「超高齢

社会」と定義付けられる「21%以上」を超える。比較的の家賃が安い学生向けアパートには、単身で暮らす高齢者も多いとい

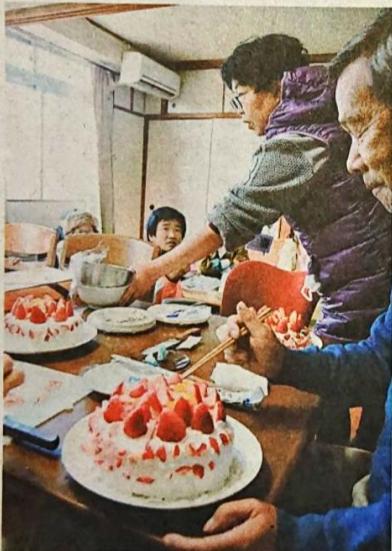
う。「困っていても、なかなか周囲と接点がない人が少なくない」と第4町内自治会長の小野寺武治さん(69)は指摘する。

そこで第4町内は昨年8月、「地域お助け隊」を結成した。16年の熊本地震を機に、自治会役員らが自主的に取り組んできた助け合い活動を基盤に、昨夏から介護保険制

「前は自分でできたことができない、と悩む高齢者が多い」と代表の安藤邦夫さん(75)。隊の一員でもある小野寺さんは「さまざまな活動を通して、互いに助け合える雰囲気をつくりつけていきたいたい」。地域の課題と向き合っている。(小多喜)

11 住み続けられる
まちづくり


度の介護予防・日常生活支援総合事業の枠組みで本格化。訪問サービスに取り組んでいる。隊員は4人。1時間200円で、玄関をふさぐ枝を切る程度の剪定や、ごみの分別、布団干しなどこれまで約50件に対応した。



「でんでん虫の家」でクリスマスケーキを飾り付ける会員ら
=2019年12月、熊本市中央区

熊本発 SDGs

持続可能な未来へ

9面に特集

支え合い

「でんでん虫」の日々

11

制度の「隙間」

解消へ 横のつながりを

に顔なじみの男性を訪ねると、身動き一つせずに横たわっていた。救急搬送したが、28度しかない体温で一歩間違えば亡くなっていた。頑なにホームレスを続ける男性の意思を尊重しながら、どう寄り添うのか。船本さんは支援の難しさを改めて痛感したという。

困難さは、制度が及ばない「隙間」にも存在する。熊本地震があった16年度、「でんでん虫」へ61件。多くは他の支援団体や医療・介護施設など「支援者」からの支援を請だった。行政機関から相談も22件あった。

「苦しむ人が落ち込んだけ制度の隙間をネットワークで埋めたい」と川崎さん。「隙間の存在を発信し、制度の不備を改めていく必要性も訴えていかなければならない」と今後の役割を認識してい

院大准教授の川崎孝明さんは(45)『社会学』は指摘する。「制度の限界、はざまに取り残され、孤立した人を支えるには、行

政も含めた支援者間の横バーガ集う。単独では難しい課題にも感じられるよう、互いに連携する「善意のネットワーク」づくりの検討に入っている。

「1人暮らしを支え合う」が信条の「でんでん虫」は、社会で孤立するあらゆる人にまなじを向ける。昨年6月に誕生した「でんでん虫の歌」。作詞した会員は急逝したが思いはつながっている。

みんな仲間だ 共に助け合ひ

歩こう でんでん虫

つらくても 幸せはやつてくる 手を取り 笑顔で進もう

われら でんでん虫

NPO法人「でんでん虫の会」が動きだしたのは2010年。アパート暮らしで社会と隔絶した元ホームレスの男性が孤独死し、2カ月も発見されなかつた出来事が設立のきっかけだった。

「でんでん虫」の前身に当たり、今もホームレス支援を続けるのがNPO法人くまもと支援の会だ。熊本市でホームレス生活を送る約15人におぎりを月1回配布。「でんでん虫」代表の船本満幸さん(70)はボランティアで参加している。

昨年末、東区の橋の下

委員会の座長で筑紫女学



でんでん虫の会のおしゃべり会で「でんでん虫の歌」を歌う会員ら=1月29日、熊本市中央区

熊本発 SDGs

持続可能な未来へ



17 パートナーシップで目標を達成しよう

※第5章 (CHAPTER 5)は終了。次章は、県立大の学生による地域振興や環境保全、震災からの復興などの活動を追いつき、持続可能な社会づくりを考えます。(小多崇)

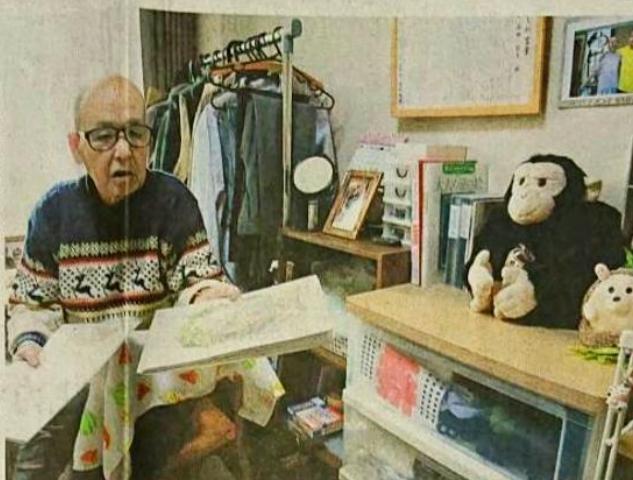


「熊本発 SDGs」の連載第5章「支え合い」は熊本市のNPO法人「でんでん虫の会」に集う人々の暮らしを見つめ、社会的孤立の問題に注目。「でんでん虫」が、その活動を先例として学ぶ認定NPO法人「抱樸」(奥田知志)

理事長)は「家族機能の社会化」を具現化しながら孤立する人々を支え続けている。「伴走型支援」を実践する抱樸の現場を訪ねた。

(編集委員 小多崇)

家族の役割 社会で担う



NPO法人「抱樸」
(北九州市)

北九州市八幡東区の「抱樸」を訪問したのは今月6日。この日、一部の新聞が抱樸の新事業「希望のまちプロジェクト」を大きく報道。他のマスコミが詔め掛け、専務理事の森松長

生さん(59)は対応に追われた。特定危険指定暴力団工藤会の本部事務所跡地(同市小倉北区)を購入する民間会社が、抱樸との間で跡地を売却する基本合意を交わ

した。生さんはハウス

ホームレス支援を始めた。1988年以来、「ひとり路の端死も出せない」「ホームレスを生まない社会を創造する」などを理念に掲げる。活動全体会員へのが

「家族機能の社会化」を目指す姿勢だ。問題意識は、ホームレスとホームレスとの違いにある」と森松さんは指摘する。

「当初は住居と仕事(生活保護)を確保し、ハウス

の支援拠点「抱樸館北九州」での取り組みだ。金と手作業の家族のよ

うで安心感があった。3年前から抱樸館の運営の一

つかが支援拠点「抱樸館北九州」での取り組みだ。金と手作業の家族のよ

うで安心感があった。3年前から抱樸館の運営の一

つかが支援拠点「抱樸館北九州」での取り組みだ。金と手作業の家族のよ

ホームレスの自立を支援

ありのまま 受け止め“伴走”



森松長生さん



伴走型支援を実践する抱樸館北九州・北九州市

・地域社会も間わっていま

る。

る。

度の押し付けでなく、意図を定める仕組みが幸福追求につながる

具体的には、

「意図設定は参加、選択、

情報アセスが欠かせない。相談支援とは、必要な情報を適切

に届け、その困難を受け止める。しかしサポートにはつながらない」と伴走する「自己意

味がある」

度の押し付けでなく、意図を定める仕組みが幸福追求につながる

具体的には、

「意図設定は参加、選択、

情報アセスが欠かせない。相

談支援とは、必要な情報を適切

に届け、その困難を受け止める。しかしサポートにはつがら

ない」と伴走する「自己意

度の押し付けでなく、意図を定める仕組みが幸福追求につながる

具体的